

先ほど読んで頂きました本日の使徒書、コリントの信徒への手紙は、最初の伝道者・最初の神学者として有名なパウロが、コリントの人々へ宛てた手紙でした。パウロは伝道者として主イエス様から召されてから、地中海沿岸を中心に3回にわたって宣教旅行をしました。コリントは第2回目の宣教旅行の際に寄ったところの一つでした。コリントは二つの湾に挟まれたところにあり、ギリシャを南北に縦断するすべての交通は、他に通り道がないのでコリントを通過するしかありませんでした。このようなことからコリントは、ギリシャの橋と呼ばれ、ギリシャの市場でもありました。

コリントは商業の中心地というより、不道德な都市として知られていました。パウロが住み、働き、大成功をおさめたコリントはこのような町だったのです。

パウロは、幻の中で「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」との声を聞き、1年6ヵ月にわたりコリントの伝道に励んだのでした。

パウロは目的の地に着くとしばらくそこへ住み込み、天幕という礼拝で欠かすことの出来なかったものを作ってそれを職業とし、宣教活動をしていたのです。誰からも援助されることのない、生活も自分で考えなければならなりません。人々から理解されずに追い出されてしまったことも、むちで打たれたことも数多くありました。しかし、伝道に対する熱意は変わることがありませんでした。そして長期間にわたる宣教旅行を3回も成し遂げ、最後にはローマへの旅をしました。その間には2週間にわたって嵐にあい、命を落とす寸前のこともありましたが、苦難を通り抜けてローマに到着し、そしてローマで殉教することになるのです。

このように考えますと、パウロはなるほど偉大な伝道者と言われるだけの人なのですが、それでは他に誰もまね出来ないような存在だったのかと言いますとそうではなかったようです。本日の使徒書はパウロもやはり有限の、弱いところを持っていた人であったことが記されております。

そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。

パウロがコリントへ行ったときの様子です。どういう理由で衰弱していたのかは分かりませんが、長い旅のこと、体調を崩したり疲れがでたのかも知れません。現

在のように医療も発達しておりませんからそれはすぐに命に関わることであったのです。また恐れに取りつかれていたとのこと。これはパウロ自身が恐ろしい体験をしたというよりも、自分が持っていた自信や人格、すなわち自分そのものを否定しなければならないような出来事に出会ったということでしょう。神様はどの人に対しても、好きなように生きてよい、自分の人格や自信を否定するものは退けてよいとは言われませんでした。神様が示されたのは、人格や自信、そういったものをまず否定し、常に自分に基準を置くのではなく、無限の完全なる神様に基準を置いて自分をこわし、新たに作り上げていくことを教えられたのです。しかしこれはパウロにとっても恐ろしく、不安なことであったのです。また、新しい土地で生活し、伝道していかなければならないというのは大変に不安なこと。人々に受け入れてもらえるか、いわゆるノルマのようにこの地で何人信徒を得なければならないということはなかったでしょうけれども、受け入れてもらえないというのはすぐに命を失うことにつながったのです。人々に受け入れてもらえないというのは反逆するものであり、平和を乱すものと信じられていたからです。

このようにパウロは決して強いばかりの人間だったのではなく、不安や恐れをたくさんもっていながら、聖書に記されている伝道活動に当たっていたのが分かります。これはパウロが主のみ心に聞いたとき、示された道だったのです。パウロは自分を愛し、自分の命を愛して伝道の使命を放棄して生きて行くことは出来たのです。コリントの地に来て、自分はもうこの地で伝道する自信がない、不安で一杯である。大きな使命を示されようものならお先真っ暗である。それよりも自分は静かに祈りの生活をし、朝晩神様に祈りをささげ、主イエスによって建てられた教会に多くの人が集うよう祈る生活をするのでは何故いけないのか。そう考えることは出来がはずです。もしかしたら考えたかも知れません。

わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、”霊”と力の証明によるものでした。

パウロはこうっています。パウロは、自分の都合で伝道したりしなかったりというのは許されることではない。霊が自分の中に働き、自分をして伝道の業につかせているのだということなのです。自分に与えられた知恵ではなく、霊の力だということです。私たちが神様のために働こうとするとき、自分の中に働く霊の力に聞き従いなさいということなのです。霊の力は自分自身がふさがれているときには聞こえにくくなり、働きを感じにくくなってしまいます。パウロのように自分自身の中にある恐れや不安を主に委ねて、自分の中に働く霊の力に動かされることを、私たちのうちに感じてみたいものです。神様によって語られる御言葉が示されることでしょう。